

(3) 調査成果

①基本層序 層厚約80cmの盛土（Ⅰ層）、オリーブ黒色粘土質シルトの湿地堆積土（Ⅱ層）、灰色粘土質シルトの湿地堆積土（Ⅲ層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第2図 平面・層序模式図

（4）まとめ トレンチの大半が搅乱を受けていた。また、湿地堆積が確認されたことから、平成26年度の発掘調査で確認された遺跡北東付近の湿地帯に連なっていたと考えられる。

（註）名取市教育委員会2016『震災復興事業関連発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第65集

II-15. 飯野坂遺跡

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図20)

飯野坂遺跡は、市内西部に南北に連なる高館丘陵から分岐して南東方向に大きく張り出す標高約40mの愛局丘陵の北東端に立地し、北西方向約600m、北東方向約90mの範囲に広がる。遺跡地名表には弥生時代前・中期・古墳時代中・後期の散布地として登録されている。遺跡内には古墳時代前期の造営とされる、前方後方墳5基、方墳2基からなる国指定史跡飯野坂古墳群がある。これまで本格的な調査が行われていないため、遺跡の様相は明らかではない。今回の調査地は遺跡の中央部東側に隣接する。

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成30年1月26日付で提出された共同住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知（同年2月7日付、文第2578号）に基づいて、同年3月7日に実施した。共同住宅新築予定地に $2 \times 2.5\text{m}$ のトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行い、現地表下約60cmで地山を確認した。Ⅲ層上面で遺構検出を行い、岡面作成と記録写真撮影の後、埋戻しを行い調査を終えた。

(3) 調査成果

①基本層序 層厚約60cmの暗褐色シルトの表土（Ⅰ層）、礫等を多く含む黒褐色粘土質シルト（Ⅱ層）、に



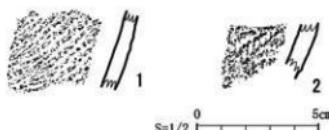
第1図 調査地位位置図

ぶい黄橙色粘土質シルトの地山（Ⅲ層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構は検出できなかった。遺物は、Ⅲ層上部で赤か黒の弥生土器体部の破片（第3図1・2、写真図版11-5・6）が2点出土した。



第2図 平面・層序模式図



番号	調査区	遺物名	層位	種別	器種	部位	特徴		法量(cm)	備考	写真 図版	全般 番号
							外観	内面				
1	IT	撲出面 弥生土器	Ⅲ層	土器	壺or壺	体部	直前段反腹LR	底減の痕明	(3.3)	11-5	R1	
2	IT	撲出面 弥生土器	Ⅲ層	土器	壺or壺	体部	附加系(LR+R+R)	ナデ	(2.3)	11-6	R2	

第3図 出土遺物

（4）まとめ 東側に隣接する雲南古墳では時期不明の溝や上塙が検出されているが（註）、それらの遺構は当該調査地までは延びてきていらないことが判明した。

（註）名取市教育委員会2015『平成25年度 名取市内遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第63集

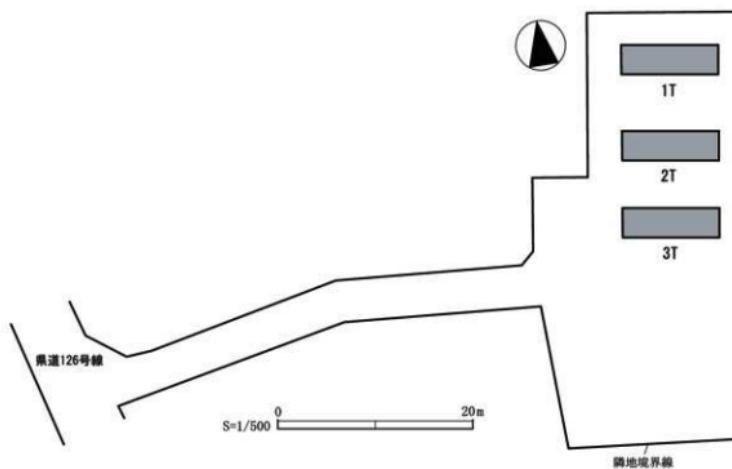
II-16. 山下遺跡

（1）遺跡の概要（I・第1表・第1図21）

山下遺跡は、国指定史跡飯野坂古墳群を構成する薬師堂古墳の北東約1km、近世の奥州街道や近代以降の旧国道4号線の東側沿いに所在する。微地形分類による第I浜堤上に立地し、東西約80m、南北約120mの範囲に広がる。遺跡地名表には、古墳・古代の散布地として登録されており、これまで試掘・確認調査が数回行われてきているが、遺構の分布は希薄で、明確な時代の遺構も発見されてきていない。今回の調査地は遺跡の南東端にあたる。



第1図 調査地位位置図



第2図 調査区配置図

(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成29年5月15日付で提出された共同住宅新築計画に伴う発掘届に対する宮城県通知(同年5月19日付、文第424号)に基づき実施した。住宅建築予定部分に3×10mのトレンチを東西方向に3ヶ所設定した。調査は同年5月29日から開始し、はじめに重機による表土(1層)の除去を行った。同日には作業員を動員し、II層上面での遺構検出作業を行ったところ、多数の柱穴、小ピットや溝のプランを検出し、随時終了したトレンチから写真撮影と平面図作成および一部遺構の完掘や成ち割りを実施した。引き続き31日にII層を除去し、III層上面での平面精査を行ったところ、性格不明の落ち込みや溝跡を2・3トレンチで検出した。6月1日～4日の中断期間を挟み、これらの遺構の掘り下げと平面図・断面図の作成、写真撮影を5日～6日行った。7日には補足調査、調査器材の撤出、壇戻しを行い、本調査的一切を終了した。

(3) 調査成果

①基本層序

I層は現代の表土層(畑耕作土)で、層厚10～20cmを計る。II層は地山粒・炭化物粒を含む褐色シルト、III層は下面がやや乱れる灰黄褐色シルトで、いずれも層厚15cm前後を計り、かつ上面が遺構検出面である。IV層はにぶい黄橙色シルトで、本地区周辺の基盤となる地山層である。

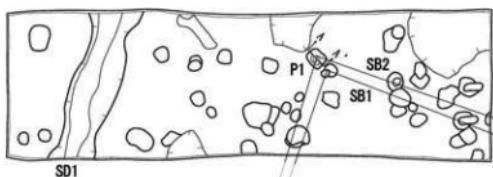
②発見した遺構と遺物

【II層上面検出遺構】

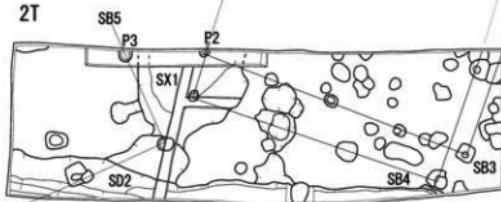
S B 1 樹立柱建物跡

I層の東半部で検出した東西2間以上、南北1間以上の樹立柱建物跡である。SB2と重複しており、それより新しい。柱穴は4基確認しており、このうち1基で柱抜取り穴を検出した。方向は北側柱列でみると、北で約60度西に偏している。規模は北側柱列で柱間が西から約1.6m、約1.4m、西側柱列で約1.5

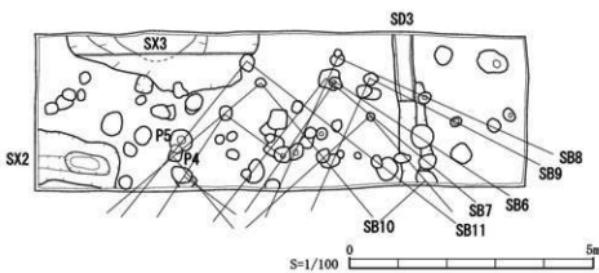
1T



2T



3T



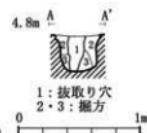
第3図 検出遺構全体図

mである。柱穴の平面形はおおよそ円形を基調としており、直径25~45cmの間である。堆積土は地山粒を少量含む褐灰色シルトである。

S B 2 堀立柱建物跡

1 Tの東半部で検出した東西2間以上、南北1間以上の堀立柱建物跡である。

S B 1と重複しており、それより古い。柱穴は4基確認しており、このうち2基で柱抜取り穴を検出した。方向は北側柱列でみると、北で約63度西に偏している。規模は北側柱列で柱間が西から約1.7m、約2.1m、西側柱列で約1.7mである。柱穴の平面形は隅丸方形もしくは略円形で、一边30~35cm、直径40~50cm、深さは29cm(P 1)である。P 1の掘方は2層に分けられ、上層が地山主体のぶい黄橙色シルト、下層が地山小ブロックを少量含む褐灰色粘土質シルトである。抜取り穴は地山粒・小ブロックを少量含む褐灰色粘土質シルトである。



第4図 P 1断面図

S B 3 堀立柱建物跡

2 Tの東半部で検出した東西4間、南北1間以上の堀立柱建物跡である。S B 4と重複しており、それより新しい。柱穴は6基確認しており、このうち3基で柱痕跡もしくは柱抜取り穴を検出した。方向は南側柱列でみると、北で約60度西に偏している。規模は南側柱列で総長約5.8m、柱間は西から約1.5m、約1.3m、約1.5m、約1.5m、東側柱列で約1.8mである。柱穴の平面形は方形もしくは略円形で、一边35~42cm、直径20~30cm、深さ35cm(P 2)である。堆積土は均質な灰黄褐色シルトである。

S B 4 堀立柱建物跡

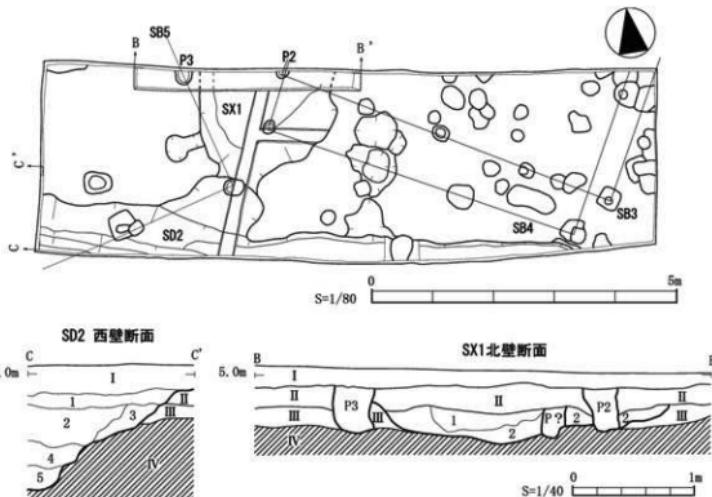
2 Tの東半部で検出した東西3間、南北1間以上の堀立柱建物跡である。S B 3と重複しており、それより古い。柱穴は5基確認しており、このうち2基で柱痕跡もしくは柱抜取り穴を検出した。方向は南側柱列でみると、北で約63度西に偏している。規模は南側柱列で総長約4.8m、柱間は西から約1.9m、約1.5m、約1.4m、約1.5m、東側柱列で約2.4mである。柱穴の平面形は不整な方形で、一边20~45cmである。堆積土は白色土粒を多量に含む褐灰色シルトである。

S B 5 堀立柱建物跡

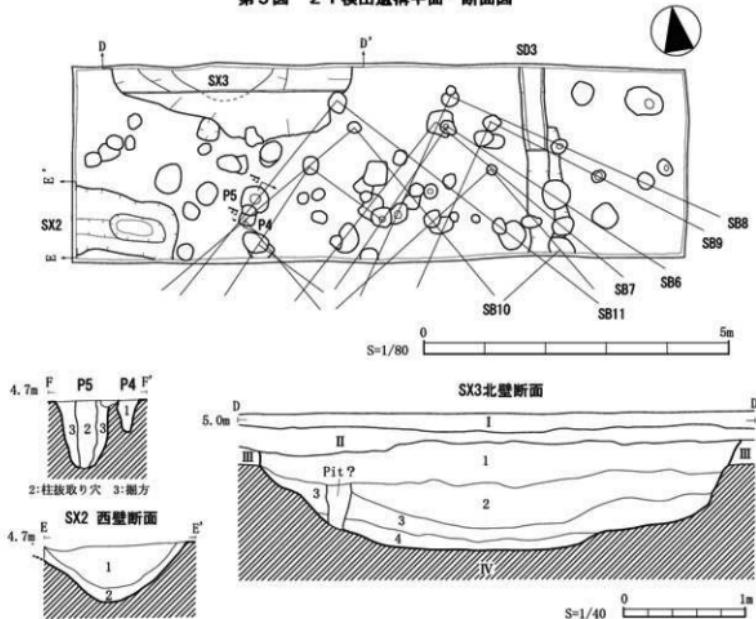
2 Tの西半部で検出した東西1間以上、南北2間以上と推定される堀立柱建物跡である。S D 2と重複しており、それより新しい。柱穴は3基確認しており、このうち1基で柱抜取り穴を検出した。方向は東側柱列でみると、北で約17度西に偏している。規模は東側柱列で柱間は約2.0m、南側柱列で約1.7mである。柱穴の平面形はおおよそ方形で、一边20~35cm、深さ38cm(P 3)である。堆積土は地山ブロックを多量に含むぶい黄橙色シルトである。

S B 6 堀立柱建物跡

3 Tの中央部で検出した東西2間以上、南北1間以上の北側に張り出しが付く堀立柱建物跡である。S B 7・8と重複しており、それより新しい。柱穴は5基確認しており、このうち2基で柱痕跡を検出した。方向は北側柱列でみると、北で約48度西に偏している。規模は身舎の北側柱列で柱間は約2.3m、西側柱列で約1.8mである。張り出しでは東西約1.4m、南北約1.5mである。柱穴の平面形はおおよそ方形で、一边20~50cmとばらつきがある。柱痕跡は直径7~10cmである。堆積土は地山ブロックを多く含む灰褐色シルトである。



第5図 2T検出遺構平面・断面図



第6図 3T検出遺構平面・断面図

S B 7 掘立柱建物跡

3 T の東半部で検出した東西 1 間以上、南北 1 間以上と推定される掘立柱建物跡である。S D 3 と重複しており、それより古い。柱穴は 3 基検出した。方向は北側柱列でみると、北で約 43 度西に偏している。規模は北側柱列で柱間は約 2.7m、西側柱列で約 2.4m である。柱穴の平面形は一辺 40cm の不整な方形、あるいは長径 50cm、短径 29cm の楕円形である。堆積上は地山小ブロックを少量含む褐色シルトである。

S B 8 掘立柱建物跡

3 T の東半部で検出した東西 1 間以上、南北 2 間以上の掘立柱建物跡である。S D 3 と重複しており、それより古い。柱穴は 4 基確認しており、このうち 2 基で柱痕跡を検出した。方向は北側柱列でみると、北で約 58 度西に偏している。規模は北側柱列で柱間は西より約 2.0m、約 1.5m、西側柱列で約 2.1m である。柱穴の平面形は一辺 22~28cm のおおよそ方形、あるいは長径 40cm、短径 28cm の楕円形である。柱痕跡は直径 10cm 前後である。堆積上は白色粒を多量に含む褐色シルトである。

S B 9 掘立柱建物跡

3 T の東半部で検出した東西 1 間以上、南北 1 間以上と推定される掘立柱建物跡である。S B 10 と重複しており、それより古い。柱穴は 3 基確認しており、このうち 1 基で柱抜取り穴を検出した。方向は北側柱列でみると、北で約 58 度西に偏している。規模は北側柱列で柱間は約 2.0m、西側柱列で約 1.9m である。柱穴の平面形は一辺 25cm の隅丸方形、あるいは長径 31cm、短径 19cm の楕円形である。堆積上は白色上粒を少量含む灰褐色シルトである。

S B 10 掘立柱建物跡

3 T の中央部で検出した東西 2 間以上、南北 2 間以上の東側に張り出しが付く掘立柱建物跡である。S B 9 と重複しており、それより新しい。柱穴は 5 基検出した。方向は北側柱列でみると、北で約 33 度西に偏している。規模は身合の北側柱列で柱間が約 2.0m、西側柱列で約 2.3m である。張り出しでは東西約 1.7m、南北約 1.3m である。柱穴の平面形は直徑 15~20cm の円形、長径 40cm、短径 25cm の楕円形、一辺 25cm の方形で、深さは P 4 で 26cm である。堆積上は白色上粒を少量含む褐色シルトである。

S B 11 掘立柱建物跡

3 T の中央部で検出した東西 1 間以上、南北 2 間以上の掘立柱建物跡である。3 T のすべての建物跡と重複関係にはあるが、新旧は不明である。柱穴は 4 基確認しており、このうち 1 基で柱抜取り穴を検出した。方向は東側柱列でみると、北で約 44 度西に偏している。規模は北側柱列で柱間は西より約 2.3m、約 1.4m、西側柱列で約 2.1m である。柱穴の平面形はおおよそ方形で、一辺 20~40cm とばらつきがある。深さは P 5 で 50cm である。掘方は、白色上小ブロックを多量に含む褐色シルトで、柱抜取り穴は、地山粒・小ブロックを多量に含む灰黄褐色シルトである。

S D 1 溝跡

1 T の西端付近で検出した南北溝跡である。重複関係はない。確認できた長さは 3.06m、上幅 0.67~0.97m、下幅 0.3~0.45m、深さ 0.1m である。方向は北で約 23 度東に偏している。堆積上は地山粒を含む灰褐色シルトの單層である。断面形は、丸みを持った逆台形である。遺物は出土していない。

S D 2 溝跡

2 T の南端付近で検出した東西溝跡である。S B 5 と重複しており、それより古い。確認できた長さは 7.65m、上幅 1.23m 以上、深さ 0.8m である。北壁の一部には、東西約 1m、南北約 1m、深さ 0.05m を計る不整形の張り出しが取りつく。方向は東で約 14 度南に偏している。堆積上は 5 層に分けられ、1 層が焼上・

地山粒を少量含む均質な褐色シルト、2層が地山粒を多量に含む黒褐色シルト、3層が地山ブロック主体の褐色シルト、4層が灰色シルトブロックを下位に含む褐色シルト、5層が地山小ブロックを上位に含む黒褐色シルトである。いずれも自然堆積である。壁は下位に段を有し、そこから直線的に外傾する。遺物は出土していない。

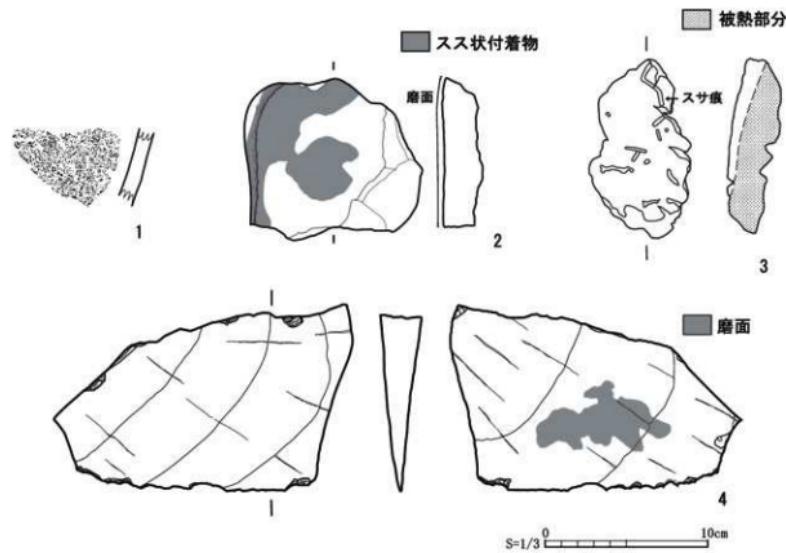
【Ⅲ層上面検出遺構】

S D 3 溝跡

3Tの東半部で検出した南北溝跡である。重複関係はない。確認できた長さは3.03m、上幅0.35~0.4m、下幅0.28~0.3m、深さ0.5mである。方向は北で約4度東に偏している。堆積上は地山ブロック主体のにぶい黄橙色シルトの単層で、人為的に埋め戻されている。底面はほぼ平坦で、壁は内湾しながら立ち上がる。遺物は出土していない。

S X 1 性格不明遺構

2Tのほぼ中央の北半で検出した落ち込みである。重複関係はない。北側がトレンチ外へ延びるため全体の形状は不明である。東西2.4m、南北1.87m以上、深さ0.36mを計る。堆積上は2層に分けられ、1層が地山ブロックを少量含むにぶい灰黄褐色シルト、2層が地山ブロック主体のにぶい黄橙色シルトである。底面はやや凹凸があるがほぼ平坦で、壁は内湾しながら緩やかに立ち上がる。遺物は、1層より無軸陶器壺の破片（第7図1、写真図版11-7）が出土している。



番号	調査区	遺構名	層位	種別	基理	部位	特徴			法量(cm)	備考	写真 図版	登録 番号
							外面	内面	口径 底径 高さ				
1	2T	SX1	I層	無軸陶器	壺	体部	ナデ	ナデ	(4.5)	中壺、在地盤	11-7	R1	
2	3T	SX2	堆土	礫石器	磨石		長さ:(11.0)、幅:(10.0)、厚さ:(2.5)、重さ:405.0g			安山岩	11-8	R4	
3	3T		II	土製品	不明		長さ:(11.0)、幅:(6.2)、厚さ:(3.0)、重さ:111.1g			スラ入り粘土	11-9	R2	
4	3T		II	打製石器	板状石器		長さ:18.4、幅:11.8、厚さ:2.5、重さ:514.3g			安山岩	11-10	R3	

第7図 出土遺物

S X 2 性格不明遺構

3 T の南西端付近で検出した落ち込みである。重複関係はない。西側がレンチ外へ延びるため全体の形状は不明であるが、検出部分では東西に長い方形状を呈する。規模は、長軸1.65m以上、短軸1.17m以上、深さ0.46mである。東壁寄りの底面には、長軸0.8m、短軸0.4m、深さ0.1~0.2mを計る長方形の落ち込みが認められた。堆積上は2層に分けられ、1層が焼上・地山粒を少量含む均質なぶい黄褐色シルト、2層が地山ブロックを多量に含む灰黄褐色砂質シルトである。底面は船底形で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、すす状の付着物がある磨石（第7図2、写真図版11-8）が出上している。

S X 3 性格不明遺構

3 T の西半付近の北よりで検出した落ち込みである。重複関係はない。北側がレンチ外へ延びるため全体の形状は不明である。東西3.93m、南北1.26m以上、深さ0.89mを計る。堆積上は4層に分けられ、1層が地山粒を少量含む均質なぶい黄褐色シルトでⅡ層に近似する。2層が地山ブロックをランダムに含む灰褐色シルト、3~4層が縞状に堆積する褐色シルト~粘土質シルトで、下層に行くほど粘性が強くなる。いずれも自然堆積である。底面はほぼ平坦で東側に浅い段がある。壁は西側では中位付近に段を有しながら内弯気味に立ち上がる。東側は直線的にやや急角度で立ち上がる。遺物は出上していない。

【堆積層出土の遺物】

II層からは、スサ入りの焼粘土塊と弥生時代の板状石器が（第7図3~4、写真図版11-9~10）出上している。

（4）まとめ

II層上面では多数の柱穴やビットを検出し、このうち建物跡としたものは11軒である。柱穴はほとんどが小規模なものでかつ近似する堆積上であり、ほぼ同じ場所で建て替えられていることから、ある一定の期間内に同一目的で構築されたものと考えられる。

1 T と 2 T で検出したSB 1~4については、建物の方向や位置関係、堆積上の類似性からすると、SB 1とSB 3、SB 2とSB 4が同一建物である可能性が高い。この場合、前者は東西4間、南北5間、後者は東西3間、南北4間の南北棟掘立柱建物跡になると想定される。3 T のSB 6~11は、いずれも建物の北東隅にあたる部分で、ほぼ同じ位置で6回の建て替えが行われていたと推測した。SD 1・2は、建物跡とほぼ同じ方向性を持つことから、関連があるとも考えられるが、詳細は明らかでない。

III層上面では性格不明の落ち込みや、南北方向の溝跡が検出されたが、その具体的な性格については不明である。

遺構の年代を知る遺物については、III層上面検出のSX 1堆積上1層から出土した無釉陶器壺の体部破片のみである。したがって、根拠に乏しいが、III層上面検出遺構は中世ごろの時期、それより新しいII層上面検出遺構はそれ以降であるが、近代まではくだらないとみられる（註）。

このほかに、II層から弥生時代の板状石器が出土している。本調査地点は、微地形分類によれば第I浜堤上に立地しているので、周辺に弥生時代の遺構が存在している可能性もある。

山下遺跡は古墳・古代の散在地として登録されている遺跡で、平成20年の北側隣接地の調査では、遺構は溝跡1条の検出と分布は希薄であった。今回の調査では、遺構の分布は濃密であり、地点によってかなり様相が異なることが明らかとなった。

（註）明治7~9年作成とされる飯野坂村の絵地図では、当該地区は畑と表記されていることから、それ以前の時期とはいえるであろう。

II-17. 貞山堀

(1) 遺跡の概要 (I・第1表・第1図22)

貞山堀は、名取市東部の現海岸線から西に約1kmの内陸を、海岸線に沿って掘られた江戸時代の水路であり、地形的には平安時代以降に形成された第3浜堤列背後の低湿地を開削して造られたものと考えられる。貞山堀は阿武隈川河口と塩釜港を結ぶ運河で、延長33kmにも及び、北部と中部、南部の3区間に分けられる。区間によって開削時期が異なり、南部に区分される名取市域・岩沼市域の貞山堀は最も早く開削されたものと考えられている。南部は総長が15kmあり、そのうち名取市域分は約5kmである。古くは仙台城および城下町建設に際し、伊具・亘理方面から用材などを運ぶために開かれた木曳堀を改修したものといわれ、完成したのは江戸時代前期頃と考えられている。整備後は舟運のほか、海岸部の新山開発のための排水路としても大きな役割をもつたものと推測されている。今回の調査地は、南部貞山堀の北部で、仙台空港の北東側付近に位置する。

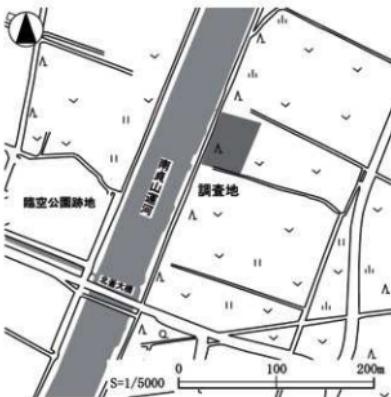
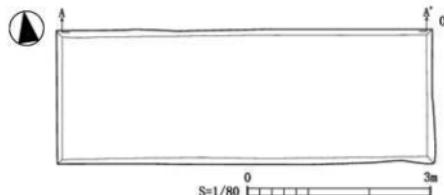
(2) 調査に至る経緯と経過

今回の調査は、平成27年9月11日付で提出された北釜大橋架け替え工事計画に伴う発掘通知に対する宮城県通知（同年10月2日付、文第1771号）に基づいて、平成29年8月31日に実施した。新北釜大橋橋台基礎工事予定地に6×2mのトレンチを設定し、バックホーにより掘削を行った。現地表下70cmまで掘り下げた所、湧水により砂の壁面が崩壊するのが予測出来たこと、また、地山が確認できたため、図面作成と記録写真撮影の後、早急に埋戻しを行い調査を終えた。

(3) 調査成果

①基本層序 層厚10cm～90cmの現代の盛土（Ⅰ層）、Ⅰ層と地山が混じる黄灰色砂の搅乱（Ⅱ層）、にぶい黄褐色砂の地山（Ⅲ層）の順に確認した。

②発見した遺構と遺物 遺構・遺物は発見できなかった。



第1図 調査地位置図



第2図 平面・北壁断面図

(4)まとめ 新北釜大橋東側橋台基礎施工予定部分は、現在の貞山堀堤体より東に約15m離れており、今回の調査地では貞山堀旧堤体に関するものは発見できなかった。

参考文献

平凡社1987『日本歴史地名人系4 宮城県の地名』